

佳作

## ソフトが教えてくれたこと

福島県 中島村立滑津小学校六年 長田 雪菜

「こんなところでつまづかないでほしい。お前にはまだ先があるだろう。」

父の言葉が、ソフトを深く考えさせてくれた。

私は小学二年生の三月からソフトボールを始めた。その時は足がおそく、運動なんて全くできなかった。今も運動ができるとは言えないけれど、学校でレレ一の選手になったり、長きより走で二位になったりはしている。

ソフトを始めたきっかけは兄だ。私より二つ年上の兄は小学三年生の夏ごろからソフトを始めた。小学四年生の時、代打で初めて試合に出てホームランを打つほどの実力だ。そんな兄の応援がしたい、兄のようにになりたい、という気持ちでソフトを始めた。ソフトを始める前から父や兄とバッティング練習やキャッチボールなど基本の練習はしていた。最初

は打てない、捕れない、投げられないダメな選手だった。でも練習を重ねていく度、空ぶりの回数が減り、バットにボールが当たる回数が増えていった。また、守備でもボールが捕れたり、上手くボールを投げられたりすることが増えた。なんだか、自分に自信が持てた。

四年生の時、初めて試合に出た。スターティングメンバーに私の名前があった。

「九番、レフト雪菜。」

「はい。」

大きな声で返事をした。自信を持ってプレーができた。フライが一球、私のところに飛んできたが、しっかり処理できた。バッティングは三振だったけれど、とても嬉しく、楽しい試合だった。

その日のように楽しい試合もあったが、悔しい試合もあった。特に悔しかった試合は七月の白獅子だ。あの負けは私のせいだ。

その大会は六年生最後の大きな大会だった。矢吹と合同で出場した。全試合に全力で取り組んだ。県大会のかかった決勝戦。小学生最後の大勝負。三番、サードを任された。最終回、二対三の二アウト満塁。一打逆転の場面で私の打順が回ってきた。この試合

では三振とデッドボールしか出ていない私。

「ツーボール、ツーストライク。」

主審の音がグラウンドにひびく。兄に教わったことを思い出し、強い気持ちで打席に立った。アウトコースのストライク球だ。カいっばいバットを振った。でも、当たらなかった。グラウンドにひびくゲームセットの声、相手の喜びの声、そして仲間の泣き声、みんな、ごめん。声にならなかった。口の中でとけて消えた。ただ、涙だけがこぼれる。

あの時、打っていたら。でも、ソフトは大好きだ。父の言葉を思い出した。ソフトはそんな経験を乗り越えて自分を強くしていくことを伝えたかったのだろう。悔しさは消えないが、この経験を大切にこれからも、大好きなソフトボールを続けていきたい。